レター

耳道内視鏡を用いた耳道洗浄後に良好な臨床経過を得た 外耳炎の犬の1例

A Canine Case of Otitis Externa Successfully Controlled after Ear Cleaning under Otoscope Observation

橋本雄一郎^{1, 2)*} 鈴木啓太¹⁾ 浅利昌男²⁾

¹⁾橋本動物病院, ²⁾麻布大学

Yuichiro Hashimoto^{1, 2)*}, Keita Suzuki¹⁾, Masao Asari²⁾

¹⁾Hashimoto Animal Hospital, ²⁾Azabu University

症例はバーニーズマウンテンドッグ、雄、未去勢、2歳齢。2006年10月より頭部を頻繁に振る動作を認め、近医における治療により症状の改善を認めなかったとのことで2007年1月に当院を受診した。

初診時の所見としては、両側耳道に大量の白色耳垢の蓄積を認めた(図1)、耳垢の塗抹検査では、*Malassezia pachydermatis*を疑わせる多数の酵母様真菌、球菌、その他桿菌を認めた。耳道内視鏡による観察の元、外耳道内の洗浄及び耳垢吸引を行った。吸引の際は、3.5 Fr. 栄養カテーテルの先端をハサミでカットしたものを用いた。洗浄液は生理食塩水を使用し、内視鏡により耳垢が完全に除去されたことを確認した後、Triz-EDTA (DermaPet, アメリカ)を耳道内に充満させた。その後、点耳薬 (Otomax, シェリング・プラウアニマルヘルス、東京)を点耳した。内服処方として、感受性試験の結果を元にセファレキシン(ラリキシ、富山化学、東京)、マルボフロキサシン(ゼナキル、ファイザー、東京)を処方するとともに、酵母菌の増殖に対してケトコナゾール、鎮痛抗炎症効果を目的としてカルプロフェン(リマダイル、ファイザー、東京)を処方した。またz/d(ウルトラ、ヒルズ、東京)も併用した。

図1 初診時:外耳道壁全体が白色耳垢に覆われ、鼓膜はほぼ確認できない。

図2 治療約1ヶ月後:耳垢は完全に除去され、鼓膜の弛緩部及び緊張部が明瞭に確認される。

* 連絡先: 橋本雄一郎 (橋本動物病院)

〒431-1115 静岡県浜松市西区和地町 6573-2

TEL 053-486-0681 E-mail: emikojanu@yr.tnc.ne.jp

治療開始から約1ヶ月後に再度内視鏡下にて耳道の観察を行った(図2)。耳道内には耳垢は全く認められず、鼓膜緊張部、弛緩部が容易に確認できた。また飼い主の報告によると、治療後は頭部を振る頻度も減少したとのことであった。

自験例では内用薬や処方食が奏功した可能性も否定できないものの、耳道内視鏡を併用することで完全な耳垢の除去が可能となり、その結果外耳炎の治療が促

された可能性が考察された。自験例における治療経過より、今後同様の症例に対して耳道内視鏡を積極的に利用することの有用性が期待された。

引用文献

- 1) Louis N.Gotthelf, 2005. pp. 407. Small Animal Ear Diseases, 2nd ed, Elsevier Saunders, Philadelphia.